

# 侏儒の言葉

## 映画文学人生論

芥川龍之介 (1892-1927)

『侏儒の言葉』 (1923-27) 「文藝春秋」

『或阿呆の一生』 (1927) 「改造」

『西方の人』 (1927) 「改造」

『続西方の人』 (1927) 「改造」

「死にたければいつでも死ねるからね」  
「ではためしにやってみ給え」

芥川龍之介『侏儒の言葉』を久し振りに読んでみた。昔は気のきいた警句に驚いて、影響を受けたりしたものだが、今は人生経験を積んでいるせいか、驚きはしない。

たとえば、

「死にたければいつでも死ねるからね」

「ではためしにやってみ給え」

と挑発され、若気の至りで、ためしにやってみたくなっただこともあるが、人間そう簡単には死ねないことがわかっている。

「万人に共通した唯一の感情は死に対する恐怖である。道徳的に自殺が不評判であるのは必ずしも偶然ではないかもしれない」

「自殺に対するモンテエエヌの弁護は幾多の真理を含んでいる。自殺しないものはしないのではない。自殺することの出来ないのである」

その通り、自殺することも出来ず、長生きをして、後期高齢者になってしまった。なぜだろう？

「古来賭博に熱中した厭世主義者のないことはいかに賭博の人生に酷似しているかを示すものである」という警句がその答の一つかもしれない。

私も若い頃は厭世主義者だったが、その後、賭博に熱中することにより、厭世観がかなり薄らいできた。もつともそうなる、今度はギャンブル依存症を克服しなければならなくなるが、それは



# 侏儒の言葉

映画文学人生論

それで別の次元の問題だ。

芥川龍之介も賭博に熱中すれば、「ぼんやりとした不安」から自殺しなくてもすんだと思うが、「わたしは金銭には冷淡だった。勿論食うだけには困らなかつたから」という芥川は賭博に深入りすることはなかつた。

食うに困らなくても、「人生は地獄よりも地獄的である」。なぜなら、人間は胃袋のほかに生殖器も持っているからだ。「天国の民は何よりも先に胃袋や生殖器を持っていない筈である」。

革命によって地獄から解放されることは期待できそうもない。「革命に革命を重ねたとしても、我々人間の生活は「選ばれたる少数」を除きさえすれば、いつも暗澹としている筈である。しかも「選ばれたる少数」とは「阿呆と悪党と」の異名に過ぎない」。

そんな風に考えると、厭世主義者はやはり自殺の誘惑にかられる。「死にたければいつでも死ぬるからね」「ではためしにやってみ給え」。

自殺は神によって禁じられているが、「わたしは神を信じていない。しかし神経を信じている」「わたしは良心を持っていない。わたしの持っているのは神経ばかりである」「あらゆる神の属性中、最も神に同情するのは神には自殺の出来ないことである」。

芥川龍之介 佛大暑かな

久保田万太郎